

繰り返される孤独死

札幌市内でまたもや孤独死が発生し、やりきれない気持ちでいっぱいです。

今回の孤独死は、去る20日、札幌市白石区内のマンションの一室で女性2人が死んでいるのを、道警の白石署員が発見し明るみに出ました。

二人の女性は、42歳の姉と40歳の妹の二人で、妹には知的障がいがあり、姉が妹の面倒を見ながら生活していたと思われます。

二人の遺体には目立った外傷はなく、姉が先に急死した後、残された妹は食事も取れないまま、餓死同然に凍死したと見られ、死後1ヵ月程度経過しているとのことでした。

姉妹は両親と死別し、2人で暮らしており、親戚とも5年近く連絡を取っておらず、社会との繋がりを断ってひっそりと生活していたようです。2人の生活の支えが妹の障害者年金だったとすれば、その生活は相当困窮していたと思われます。

管理会社では、昨年の12月中旬から姉妹と連絡が取れなくなり、警察に届け出たとのことですが、そこに至るまでの間に、2人の孤独死を防ぐ手だてはなかったのでしょうか。

マンションでは、隣にどのような人が住んでいるのか、どのような生活をしているのかほとんど分からないというのが普通でしょう。ですから、マンションの住人に、何故気がつかなかったのかと批判することはできません。むしろ、我々自身が、そうした人間関係の希薄な社会にいるということに自覚する必要があります。

今回の場合、昨年11月末からガスが止められていたとのことですから、この厳冬期、室内といえども氷点下となっていたと思われます。ガス代を払っていないから止めるということは、そのことだけ捉えれば間違っていないと思います。しかし、厳冬期にガスを止めればどういう事になるかという想像力は働かなかったのでしょうか。

私は、ガス会社を批判するつもりでこの一文を書いているのではありません。ただ、電気・ガス・水道は、私たちの生活を支えるセーフティネットである以上、料金が未納なら止めると機械的に処理する前に、ショックアブソーバーの

ような対応も必要なのではないかと考えています。

これは、ガス会社だけではありません。マンションの管理会社も、家賃の滞納が続けば、督促もするでしょうし、その際、その暮らしぶりについてもう少し関心を持つべきでしょう。普通は、生活に困っているから家賃を滞納するのでしょうから、行政との橋渡しをするなどの配慮も必要だったと思います。会社側に、そこまでの責任がないことは当然です。しかし、昔は「大家といえれば親も同然、店子といえれば子も同然」という言葉があったことを思い出し、残念な気がします。

また、行政の目配りも十分だったとは思えません。窓口で3回も相談に行っているのに、何故支援に結び付かなかったのでしょうか。「生活保護の申請をすれば良かったのに」という声も聞こえてきそうですが、世の中には、生活保護を当然の権利とばかりに声高に請求する人ばかりではありません。生活保護を受けることは良くないと思いこんでいる人もいますし、生活保護を受けることに思い至らない人もいます。行政として、もう一步踏み込む姿勢が必要なのであり、「申請がなかったから支援しなかった」ということでは済ませることができません。特に今回の場合、知的障がいのある妹に対して障害者年金を支給していたのですから、障害者年金の受給者の生活についてもう少し関心を持って良かったと思います。

ガス会社や行政のみならず関係機関は、それぞれ必要な手続きを遺漏なく進めておられたのだと思いますが、それでも孤独死を防ぐことができませんでした。これが、豊かな日本の現実です。

居間のテーブルには、約4万3000円という現金が置かれていたといえます。しかし、結局のところ、その現金が妹を救うことには繋がらなかった、という重い現実だけが残ってしまいました。(塾頭 吉田 洋一)